

携帯電話とパソコンの利用実態

— ソーシャルサポートとの関連性の検討 —

兎本由香里

日下部典子

福山大学大学院人間科学研究科

福山大学人間文化学部心理学科

キーワード：携帯電話，パソコン，ソーシャルサポート

はじめに

私たちを取り囲むメディア環境は急激に変化しており、携帯電話やパソコンは、今や大人だけが持つものではなく、子ども達も頻繁に利用するようになってきている。こうしたメディア環境の変化に伴い、子どもの対人関係の変化や、家庭環境の変化についても関心が向けられている。平成21年度の総務省の調査によると、平成20年度の年代別のパソコン利用率は、6～12歳で63.6%、13～19歳で95.5%、20～29歳では96.3%となっている。また、携帯電話の利用率は、6～12歳で29.8%、13～19歳で83.6%、20～29歳では97.3%となっている（総務省、2009a）。6～12歳の携帯電話利用率はパソコンの利用率より低いが、13～19歳、20～29歳のパソコンおよび携帯電話利用率は8割を超えていることから、パソコンや携帯電話は、児童生徒の生活に深く浸透しており、生活の一部になっているといえる。また、パソコンや携帯電話の増加に伴いインターネット利用率も増加している。年代別のインターネット利用率は6～12歳で約7割、13歳以上では9割を超えており、男女別では男女ともに7割を超えている。

以上の調査から、パソコンや携帯電話、インターネットは今や我々の日常生活の中で大きな役割を占めているといえる。しかし、パソコンや携帯電話からのインターネット利用が充実する一方で、携帯電話依存やインターネット依存、現実場面での対人関係の希薄化といった問題も指摘されている。山下（2001）は、携帯メールに熱中する若者に対して、対面コミュニケーションを行う機会や意欲が減少し、現実社会の他者との付き合いが希薄化したり、社会性の発達が妨害される可能性を指摘している。

しかし最近では、パソコンや携帯電話、インターネットがもたらすマイナス面だけでなく、プラス面の影響への関心も高まっている。例えば、安藤・坂元・鈴木・小林・檀淵・木村（2004）が大学生を対象に行った研究では、

(1) チャットなどの使用によってネット上の異性の友人が増加し、その人数の多さによって人生満足感や社会的効力感が高まる、(2) Eメールなどの使用によって、ネット上の同性友人が増加し、その人数の多さによって社会的効力感が高まることが示されている。また、赤堀・坂本（2008）では、携帯電話の使用と友人関係の緊密性との間に正の相関が認められており、携帯電話の利用頻度が多いほど、深い友人関係を形成していることが報告されている。さらに、パソコンや携帯電話といったメディアツールは、不登校の児童生徒の支援や予防にも活用されている。金谷・小林・千葉・伊藤・西本（2007）は、登校時の様子などの「おはようメッセージ」を起床時に携帯電話を通じて伝える「モーニング・コミュニティ」を活用し、不登校や引きこもりの予防について検討している。その結果、実験前よりも外に出かけなくなったり、気持ちが前向きになるといったプラスの効果が確認されており、不登校や引きこもりの予防に一定の効果があることを示唆している。また、加藤・古屋・赤堀（2004）は不登校児童生徒を対象に電子メールカウンセリングを実施しており、電子メールカウンセリングによる不登校状態の改善や、自発的な発言の増加がみられたことを報告している。これらの先行研究から、日常的なネット使用によってネット上での対人関係を形成したり、維持したりする経験は、ネット上だけでなく、現実の対人関係場面で必要とされる対人的スキルを増加させることにもつながると考えられる。また、インターネットでのやりとりを通じて、ネット内外の人物からソーシャルサポートを得られる可能性も考えられる。

ソーシャルサポートとは「ある個人が、自分と関わりを持っている人々（家族、友達、先生など）からどのように、どの程度援助を受けているかに関する認知」と定義される（森・堀野、1992）。ソーシャルサポートを扱った

研究は多く、藤田 (2006) が小学生を対象に行った研究では、ソーシャルサポートが提供されていると感じることが自己肯定感を高めることが示されている。また森田 (2003) も、ソーシャルサポートが多いほど生活満足感や肯定的な感情が増加することを示している。そして、これらの研究の多くは、サポート源として、両親、きょうだい、先生、友だちを設定している。しかし、これらの先行研究の友人や友だちといったサポート源は、学校での友人関係といった身近な関係に限定しているものがほとんどであり、インターネット上で知り合った友人を設定して検討したものは少ない。安藤・高比良・坂元 (2005) が、現代は、対面での出会いに加え、対人関係が構築しやすいインターネットが新たな出会いの場となっている、と指摘していることから、ソーシャルサポートは学校内外の友だちだけでなく、パソコンや携帯電話のインターネット上で得た友だちからも得られると考えられる。

しかしながら、パソコンや携帯電話、インターネットの利用法には電子メール、チャット、電子掲示板、ウェブページの作成や閲覧などさまざまなものがあり、個人によって使い方も多様である。平成 21 年度の総務省の「情報通信白書」によると、パソコンからのインターネット利用機能は、「ホームページ・ブログの閲覧」が最も多いが、携帯電話からのインターネット利用機能は、「電子メールの受発信」が最も多く、インターネットは利用するツールによって利用目的が異なることが示されている (総務省, 2009b)。また利用時間についても、三上 (2004) は携帯電話での通話は男性のほうが長い、携帯メールは女性のほうが長いことを報告している。これより、インターネットやメールは、パソコンと携帯電話の両方から利用できるが、どちらのツールを用いるかによって利用時間や利用目的に個人差が生じると思われる。また、インターネットの利用目的も、学年や生活環境によって異なると思われる。しかし過去の研究では、パソコンと携帯電話両方の利用実態と、各ツールからのインターネット利用を同時に調査したものは少ない。また調査対象者も、安藤ら (2004) や、安藤ら (2005) のように、特定の世代に対して調査したものは多くあるが、小学生から大学生までの幅広い世代を対象とした研究は少ない。インターネット上から得られるソーシャルサポートを検討するためには、まず、児童生徒、学生がどの程度パソコンや携帯電話、インターネットを利用しているかを知る必要があると考えられる。

そこで本研究では、インターネット上でソーシャルサポートを得ることは可能かどうか検討するための第一段階として、まず、小・中・高・大学生を対象に、パソコンおよび携帯電話の利用と、それぞれからのインターネット利用についての実態調査を行うことを目的とする。なお、小学生については、携帯電話よりパソコンの保有率、利用率が高いため、パソコンの利用に限定する。本研究の仮説として、(1) 通話やメール利用回数は、男子よりも女子のほうが多い、(2) パソコンや携帯電話の利用機能は、男女によって違いがある、(3) インターネットで知り合った友人の人数は、学年が上がるごとに増える、という3つを挙げ、比較検討を行う。

方 法

参加者 市立小学校に在籍する4~6年生243名 (平均年齢10.8歳, $SD=1.1$)、市立中学校1~3年生360名 (平均年齢13.7歳, $SD=0.9$)、県立高校1~3年生265名 (平均年齢16.7歳, $SD=0.9$)、私立大学1~4年生269名 (平均年齢19.7歳, $SD=1.3$) が調査に参加した。

実施方法 小・中・高では、調査実施前に校長に調査内容、倫理的配慮について説明し、同意を得た。その後、質問紙は各学級の担任教諭を通じて全学年に配布された。質問紙調査は授業内に集団に対して一斉に実施され、授業終了時に担任教諭によって回収された。大学は、講義の時間を利用して、調査者が集団に対して一斉に実施した。

実施期間 2009年11月下旬~2010年1月下旬。

調査項目 本調査ではまず、大学生用の調査用紙を作成した。そして小、中、高校生用の調査用紙は、大学生用の調査用紙を基に分かりやすい文章に書き換え、未成年が利用できないサービス (オークションなど) は項目を削除した。調査用紙には、インターネットで知り合った友人数や携帯電話所持の有無などを尋ねるフェイスシートの

ほか、メールやインターネットの利用回数、通話時間、携帯電話およびパソコンの利用機能、メールの通信相手などについて尋ねた。なお、小学生用については、回答への負荷を考慮し、総務省（2009a）の調査より、携帯電話利用率が約3割、パソコン利用率が約7割であったため、調査用紙はパソコン利用についてのみ尋ねた。

結 果

1. 通話時間および各ツールからのメール利用回数について

通話時間は、中学生では男女ともに「全くしない」が最も多かった。有意差が認められた回答は「0～5分」で、男子の約2割と比べて女子のほうが3割と有意に多かった（ $\chi^2(14, N=263) = 58.74, p < .01$ ）。高校生で最も多かった回答は、「0～5分」であり、男女ともに約半数が回答していた。大学生でも最も多かった回答は「0～5分」であった。そのほか「30分～1時間未満」、「1～2時間」という回答では有意差が認められ、女子の方が多いことが示された（ $\chi^2(7, N=263) = 27.49, p < .01$ ）。これらの結果より、通話時間は全体的に女子の方が多く、また、学年が上がるごとに通話時間が増えることが示された。しかし、中学生から大学生まで共通して多かった回答は「0～5分」であったことから、電話機能を利用する時間は比較的短く、簡単な連絡用として用いられている可能性が示唆された。

次に、各ツールからのメールの利用回数は、利用するツールによって利用回数に違いがみられた。まず、携帯メールについては、中学生は、男子の約6割が「全くしない」、女子の約半数が「0～20回」と回答していた。高校生および大学生では男女ともに「0～20回未満」が最も多かった（約7割）。性別で有意差が認められた回答は、高校生で「20～40回未満」、大学生は「40～60回未満」であり、どちらも男子より女子のほうが有意に多く利用していた（ $\chi^2(11, N=251) = 29.23, p < .01$; $\chi^2(7, N=269) = 25.88, p < .01$ ）。携帯メールの利用頻度は、中学生、高校生、大学生の順に多く、また、女子のほうが頻繁に利用していることが明らかとなった。また、パソコンメールについては、小学生から高校生までの約9割が「全くしない」と回答しており、大学生も男女ともに過半数が「0～20回未満」と回答しており、パソコンメールは携帯メールと比べてほとんど利用されていないことが示された。

2. 通話、携帯メール、パソコンメールの通信相手について

本調査では、通信相手として、「父」、「母」などの13項目を設定し（表1）、各ツールの通信相手について平均利用頻度得点を算出した。そして平均利用頻度得点を基に、性別によって相手に違いがみられるかを検討するため、性×通信相手の2要因分散分析を行った。その結果、小学生では、性および通信相手の主効果、交互作用に有意差は認められなかった。各通信相手における平均項目得点も、全ての通信相手で1点であったことから、小学生は、通信相手に関わらずパソコンのメール自体をほとんど利用していないことが示された。

中学生から大学生のパソコンメール利用については、各ツール別の2要因分散分析の結果、性および通信相手の主効果は認められず、パソコンメールはほとんど利用されていないことが明らかとなった。しかし、通話および携帯メールでは、通信相手の主効果が有意であったため多重比較を行った。中学生から大学生までの通話および携帯メールの多重比較結果を表1に示す。

表1より、通話相手については、中学生から大学生の全てで「母」への利用頻度が最も高かった。そのほか、「父」や「きょうだい」などの回答も多くみられ、家族への連絡用として頻繁に用いられていることが示された。家族以外の通信相手では、「学校の同性の友人」への利用が多かったが、高校生と大学生では、「恋人」という回答も多くみられた。この結果より、通話機能は家族以外に学校の友人へも多く利用されており、学年が上がるにつれてより多くの相手と通話していることが明らかとなった。

携帯メールについては、通話相手とは異なる結果が得られた。中学生から大学生の全てで「学校の同性の友人」

表1 中学生・高校生・大学生における通話および携帯メールの通信相手

通信相手	通話			携帯メール		
	中学生	高校生	大学生	中学生	高校生	大学生
1 父	4,5,6,8,9,10,11,12	5,6,10,11,12	5,6,11,12	4,5,6,10,12	5,6	6
2 母	7以外の全ての相手	7以外の全ての相手	7以外の全ての相手	7以外の全ての相手	5,6,7,10,11,12	3,5,6,8,10,11,12
3 きょうだい	4,5,6,10,11,12	5,6,10,11,12	5,6,10,0,11,12	4,5,6,10,12	5,6,11,12	5,6,11,12
4 恋人	—	5,6,8,10,11,12	5,6,10,11,12	—	5,6,10,11,12	5,6,10,11,12
5 学校の先生	—	—	—	—	—	6
6 学校以外の先生	—	—	—	—	—	—
7 学校の同性の友人	8,9,10,11,12	8,9,10,11,12	8,9,10,11,12	全ての通信相手	全ての通信相手	全ての通信相手
8 学校の異性の友人	10	11,12	11,12	10,12	10,11,12	10,11,12
9 学校以外の同性の友人	12	11,12	10,11,12	10,12	10,11,12	10,11,12
10 学校以外の異性の友人	—	12	11,12	—	—	11,12
11 ネットで知り合った同性の友人	—	—	—	—	—	—
12 ネットで知り合った異性の友人	—	—	—	—	—	—

注)通話、携帯メール欄の番号は、左側の対象よりも利用頻度が有意に少ないものを示す。

特に利用頻度が高かった相手は斜線で示す。

への利用が最も多く、次いで「母」への利用が多いことが示された。両親への連絡方法には違いがあり、「母」への連絡は通話に限らず、携帯メールでも頻繁に行われているが、「父」へは携帯メールよりも通話が多く利用されていることが明らかとなった。また、携帯メールの通信相手も、中学生と高校生、大学生との間に違いがみられた。「恋人」への携帯メール利用について、中学生はほとんど利用していなかったが、高校生と大学生では「恋人」への利用が3番目に多く、この結果は通話相手と同様であった。これらの結果より、中高生は学校の同性の友人と学校で直接話す以外にも通話や携帯メールを利用して会話をしており、また、学年が上がるにつれて恋人との連絡も増加することが明らかとなった。

3. インターネットの利用時間と各ツールの利用機能について

携帯電話およびパソコンからのインターネット利用時間は、ツールおよび学年の両方で違いが認められた。インターネット利用時間をツール別にみると、パソコンからのインターネット利用時間は、小学生では「30～59分」、中学生では男子「1～2時間未満」、女子「2～3時間未満」、高校生および大学生は「全くしない」という回答が最も多くみられた。すなわち、中学生については、全体的な利用時間は性別によって利用時間が異なることが示された。また、携帯電話からのインターネット利用時間については、中学生は男子の7割、女子の半数が「全くしない」と回答しており、 χ^2 検定の結果、男子のほうが携帯電話でのインターネットを利用していないことが示された (χ^2 (14, $N=263$) = 34.64, $p < .01$)。休日の利用時では、「3時間以上」が女子のほうが有意に多いことが示され (χ^2 (14, $N=263$) = 42.35, $p < .01$)、女子が休日のより多くの時間、携帯電話でインターネットを利用していた。高校生では「3時間以上」という回答が最も多く、 χ^2 検定の結果、女子のほうが有意に多く利用していた (χ^2 (7, $N=251$) = 15.20, $p < .01$)。大学生では性別によって回答に違いがみられ、男子は「1～2時間未満」、女子は「3時間以上」が最も多かった。これらの結果より、携帯電話からのインターネット利用は学年に関わらず女子のほうが長時間に利用していることや、パソコンからの利用よりもより長い時間利用されていることが明らかとなった。

次に、本調査では携帯電話およびパソコンの利用機能について、携帯電話機能は「メール」や「電話」など15項目、パソコン機能は「ワード」、「エクセル」などの13項目を設定し、それぞれの平均利用頻度得点を算出した(表2)。そして性別による利用機能の違いを検討するため、性×利用機能の2要因分散分析を行った。その結果、小学生から大学生の全ての利用機能の主効果が1%水準で有意だったため、多重比較を行った。多重比較結果をツール別および学年別に示したものを表2に示す。

表2より、携帯電話の利用機能は、中学生から大学生までの全てで「メール」の利用頻度が最も高く、次いで「電話」、「インターネット」であった。2要因分散分析の結果、性の主効果が有意であり、携帯電話の機能全体の利用頻度は男子よりも女子のほうが有意に多いことが明らかとなった (F (1, 2074) = 10.61, $p < .01$; F (1, 2516) = 7.62, $p < .01$; F (1, 2197) = 4.40, $p < .01$)。また、「カメラ」や「アラーム」といった、本来の携帯電話の目的とは異なる機能も多く利用されていた。

また、パソコンの利用機能については、小学生から大学生までの全てで「インターネット」が最も多く利用されていた。その他多かった回答として「ゲーム」や「音楽鑑賞」などがみられた。性差を検討した結果、大学生では性の主効果が有意となり、パソコンの機能全体の利用頻度は男子よりも女子のほうが多いことが示された (F (1, 2211) = 3.37, $p < .01$)。これらの結果より、「インターネット」の利用が最も多かったことから、携帯電話とパソコンの利用機能には違いがあることが示された。さらに、パソコン利用機能の中の「ワード」、「エクセル」をみると、小学生から高校生まではほとんど利用していないが、大学生では多く利用されており、学年があがるにつれて利用する機能も増加していた。

さらに本調査では、各ツールからのインターネットで利用する機能についても尋ねた。その結果、パソコンでは「インターネット」、「ブログの閲覧」、「掲示板の閲覧」、「ホームページの閲覧」などの回答が多かった。また、携

表2 携帯電話およびパソコンの利用機能における多重比較結果

利用機能	小学生	中学生	高校生	大学生
1 メール		全ての利用機能	3以外の全ての利用機能	3,8以外の全ての利用機能
2 電話		5,6,7,9,11,12,13,14,15	4,5,6,7,9,11,12,13,14,15	3,8以外の全ての利用機能
3 インターネット		6,7,9,11,12,14,15	10以外の全ての利用機能	8以外の全ての利用機能
4 カメラ		6,7,9,11,12,13,14,15	5,6,7,9,12,13,14,15	6,7,9,11,12,13,14,15
5 電卓		6,7,8,12,14,15	6,14,15	6,7,9,11,12,13,14,15
6 辞書		12,14,15	12,14,15	9,12,14,15,
7 スケジュール		12,14,15	14,15	9,12,14,15
8 アラーム		9,11,12,13,14,15	9,11,14,15	9,10,11,12,13,14,15,
9 ワンセグ		12,14,15	12,14,15	12,14,15
10 ミュージックプレイヤー		11,12,14,15	11,12,13,14,15	12,14,15
11 動画再生		12,14,15	12,14,15	12,14,15
12 GPS		—	14,15	14,15
13 ゲーム		14,15	14,15	14,15
14 おさいふケータイ		—	—	—
15 歩数計		—	—	—
1 メール	—	2,4,5	—	2
2 テレビ電話	—	—	—	—
3 ワード	—	4,5	4,5	4,5,6,8,10,11,12,13
4 エクセル	—	—	—	5,6,11,12,13
5 パワーポイント	—	—	—	—
6 ペイント	—	—	—	—
7 インターネット	全ての利用機能	全ての利用機能	全ての利用機能	全ての利用機能
8 ゲーム	10,12,13,	10,11,12,13	11,12,13	11,12,13
9 音楽鑑賞	10,12,13,	10,11,12,13	10,11,12,13	10,11,12,13
10 DVD鑑賞	—	—	11,12,13	11,12,13
11 テレビ観賞	—	—	—	—
12 画像編集	—	—	—	—
13 音楽編集	—	—	—	—

注) 通話、携帯メール欄の番号は、左側の対象よりも利用頻度が有意に少ないものを示す。
特に利用頻度が高かった機能は斜線で示す。

携帯電話では「掲示板の閲覧」が最も多く、この結果は中学生から大学生まで一致していた。

4. インターネットで得た友人数について

本研究では、携帯電話およびパソコンからのインターネットで知り合った同性、異性の友人数を尋ねた。その結果、小学生は全体の約9割が「0人」と回答していた。中学生は、全体の8~9割が「0人」と回答していたが、携帯電話やパソコンのインターネットで友人を得たとの回答は約2割であった。高校生は6~7割が「0人」と回答しており、携帯電話でのインターネットで得た友人がいると回答したのは3割であった。大学生は両ツールとも「0人」が最も多く、中学生と同様の結果となった。これらのことから、中学生および高校生は、パソコンよりも携帯電話を介してより多くの友人を得ていることが明らかとなった。

考 察

1. 通話時間および各ツールからのメール利用回数について

本調査の結果、通話時間は全体的に女子のほうが長く、学年があがるごとに、通話時間が長くなっていることが示された。しかし、中学生から大学生まで共通して多かった回答は「0~5分」であったことから、電話機能を利用する時間は比較的短く、簡単な連絡用として用いられている可能性が示唆された。また、各ツールからのメール利用回数は、携帯電話とパソコンの間で違いがあり、携帯メールは、中学生、高校生、大学生の順に多く、女子のほうが頻繁に利用していた。パソコンメールは、小学生から高校生までの約9割が「全くしない」と回答しており、大学生も男女ともに過半数が「0~20回未満」と回答していた。メールは女子が多く利用していることや、パソコンよりも携帯電話で頻繁に利用されている結果となり、足立・高田・雄山・松本(2003)の結果と一致していた。

本調査の結果より、女子は通話時間が長く、メールの利用回数も多いことが示され、仮説(1)「通話やメール利用回数は、男子よりも女子の方が高い」を支持する結果となった。女子のメール利用が多かったことは、女子における対人関係の方略が関係していると考えられる。女子の対人関係方略について柴橋(2004)は、「女子は相手との関係維持に気を遣い、その背景で友人からどう思われるかという不安・懸念を強く感じている」と述べており、周囲の友人に合わせることで関係を維持し、自分自身を守る傾向があると指摘している。すなわち、女子の携帯メール利用が高かった理由として、女子は携帯メールを新たな対人関係を形成するよりも、既に形成されている人間関係を維持するためのツールとして利用している可能性が考えられる。しかし本調査では、通話やメールの具体的な内容については検討していない。過去の研究でも利用頻度を尋ねたものは多くあるが、どのような内容・目的で利用したのかを検討したものは少ない。会話の内容によって通信相手が異なる可能性も考えられるため、今後はやりとりの内容についても検討することが必要と思われる。

2. 通話、携帯メール、パソコンメールの通信相手について

表1より、通話相手は中学生から大学生の全てで「母」への利用頻度が最も高かった。また、「母」に続いて「父」や「きょうだい」への利用も多く、通話機能は主に家族への連絡のために用いられている可能性が示唆された。また携帯メールは、「学校の同性の友人」への利用が最も多かった。この結果は、藤本・山尾(2006)の研究でも報告されている。また、「母」や「学校の同性の友人」といった通信相手は、ソーシャルサポート研究でも、サポート機能が低い相手として挙げられている。嶋(1991)は、家族の中では母親が最もサポート機能が低いことや、きょうだいは手段的サポート、同性の友人は心理的サポートに関して重要なサポート源となっていることを示しており、通話や携帯メールは、何らかのサポートを得るためのツールとして用いられている可能性が示唆された。

3. インターネットの利用時間と各ツールの利用機能について

パソコンからのインターネット利用時間は、小学生で「30-59分」、高校生や大学生は「全くしない」という回答が多く、学年や性別によって異なっていた。また、携帯電話からのインターネット利用時間も、中学生は「全くしない」、高校生は「3時間以上」、大学生は「1~2時間未満」または「3時間以上」と、学年があがるにつれて増加していた。この理由として、インターネットでの利用機能が関係していると考えられる。本調査で携帯電話からのインターネット利用機能を検討した結果、中学生から大学生では「掲示板の閲覧」が他の機能よりも多く利用されていた。掲示板やブログでのコミュニケーションについて山本・諏訪・岡田・山本(2007)は、(1)更新する側と閲覧する側の双方向的な交流を可能にする、(2)意みや考えの共有や、友人・知人間の新たな関係構築を可能にするとして述べている。つまり、掲示板の利用は、利用頻度が増えるほど他者との交流が増え、交流が増えるほど関係を維持するためにより頻繁に利用するようになるため、利用時間も増えると考えられる。

また、ツール別の利用機能は、携帯電話では中学生から大学生までの全てで「メール」の利用頻度が最も高く、パソコンでは、「インターネット」が最も多く利用されていた。また、機能全体の利用頻度は女子のほうが多かった。これらの結果より、仮説(2)「パソコンや携帯電話の利用機能は、男女によって違いがある」は支持されたといえ、総務省が2001年に調査した結果とも一致していた。携帯電話とパソコンの利用機能に違いがみられた理由としては、学習環境の変化や、それぞれのツールに求められる利用目的の違いが関係していると考えられる。鎌田・高橋(2006)の研究では、パソコンの利用目的として、「Webサイト閲覧」に次いで「学習」が多いことが報告されている。さらに、平成18年度以降の大学入学者は、高校において「情報」の授業が必修となっていることから、学習環境の変化がパソコンに触れる機会やインターネットで調べ物をする機会を増加させたと考えられる。また、携帯電話で「メール」の利用が多かった理由としては、「小型でいつでもどこでも持ち歩ける」という携帯電話の特徴と、「直接言にくいことを伝えたり、自分の都合で連絡ができる」という、メールが持つメリットが関係していると考えられる。携帯メールでは、自分が実際に経験した出来事や気持ちをその場で相手に伝えたり、反対に、その場では言いにくかったことを文章にして改めて伝えることができる。つまり、ツールによる利用機能の違いは、「パソコンは情報収集、携帯電話は情報伝達のため」といった目的による使い分けによって生じている可能性が示唆された。

4. インターネットで得た友人数について

携帯電話およびパソコンからのインターネットで知り合った同性、異性の友人数は、小学生から大学生の多くが「0人」と回答していた。しかし、インターネット上で知り合った友人がいると回答したのは、小学生の約1割、中学生の約2割、高校生と大学生は約4割と、学年があがるごとに増加しており、仮説(3)「インターネットで知り合った友人の人数は、学年が上がるごとに増える」は支持されたといえる。しかし先行研究の結果よりも少なかったことや、携帯メールの相手として「学校の同性の友人」が最も多かったことから、現代の生徒や学生にとって、インターネットで知り合った友人は、ソーシャルサポートのサポート源として機能しにくい可能性が示唆された。

本調査の結果より、インターネット上で得られるソーシャルサポートについては、携帯メールを介してのコミュニケーションによって得られる可能性や、インターネット上で知り合った友人よりも学校の友人や両親から多く得られている可能性が示唆された。また、通信相手も「母親」や「学校の同性の友人」への利用が多く、インターネット上で知り合った友人とはほとんど交流していないことや、携帯メールでは「学校の同性の友人」とのやりとりが最も多かった。本研究では、携帯メールは学校での友人関係を維持する重要なツールとなっており、学校で実際に会うだけでなく、携帯メールからの会話からもソーシャルサポートを得ている可能性が示唆された。しかし、本研究は、携帯メールの利用頻度や、通信相手の検討のみであり、ソーシャルサポートが得られているかは不明である。そして、過去の研究でも、学校の友人からのソーシャルサポートがストレスや抑うつ軽減につながることを報告しているが(石毛・武藤, 2005)、学校の友人との携帯メールから得られるソーシャルサポートについて検討し

たものは少ない。携帯メールから得られるソーシャルサポートについて検討することは、不登校や引きこもりなどの不適応傾向を示す児童生徒への対人関係形成や健康増進にも役立つと考えられるため、今後は、学校で得られるソーシャルサポートだけではなく、携帯電話などのメディアツールから得られるソーシャルサポートについても早急に検討することが必要と思われる。

引用文献

- 足立由美・高田茂樹・雄山真弓・松本和雄 (2003). 携帯電話コミュニケーションからみた大学生の対人関係 教育学科研究年報, 29, 7-14.
- 赤堀瑠以・坂本章 (2008). 携帯電話の使用が友人関係に及ぼす影響—パネル調査による因果関係の推定—パーソナリティ研究, 16, 363-377.
- 安藤玲子・高比良美詠子・坂本章 (2005). インターネット使用が中学生の孤独感・ソーシャルサポートに与える影響—パーソナリティ研究, 14, 69-79.
- 藤田大輔 (2006). 小学生の健康・安全統制感とソーシャルサポート認知との関連性—大阪教育大学紀要, 55, 174-185.
- 石毛みどり・無藤 隆 (2005). 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャルサポートとの関連—受験期の学業場面に着目して—教育心理学研究, 53, 356-367.
- 鎌田浩子・高橋尚子 (2006). 大学生のパソコン・携帯電話利用の現状と課題—北海道教育大学紀要, 38, 103-112.
- 金谷裕幸・小林智也・千葉慶人・伊藤直樹・西本一志 (2007). コミュニティ活動を利用して意欲を高める相互扶助型目覚まし時計—情報処理学会研究報告, 63, 85-90.
- 加藤尚吾・古屋雅康・赤堀侃司 (2004). 電子メールカウンセリングによる不登校児童生徒の変容に関する分析—日本教育工学会論文誌, 28, 1-14.
- 三上俊治 (2004). インターネットの開く新世界—三上俊治 (著) メディアコミュニケーション学への招待—学文社 pp.167-207.
- 三宅喜美代 (2002). ケータイメールを利用する若者の対人関係—大垣女子短期大学研究紀要, 43, 49-59.
- 森 和代・堀野 緑 (1992). 児童のソーシャルサポートに関する一研究—教育心理学研究, 40, 402-410.
- 森田 薫 (2003). 青年期におけるソーシャルサポートと主観的幸福感との関連—嶋 信宏 (1991). 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究, 教育心理学研究, 39, 440-447.
- 柴橋祐子 (2004). 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因—教育心理学研究, 52, 12-23.
- 嶋 信宏 (1991). 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一考察, 教育心理学研究, 39, 440-447.
- 総務省 (2009a). 通信利用動向調査.
- 総務省 (2009b). 情報通信白書.
- 土橋臣吾 (2003). 携帯インターネット利用の日常性—情報メディアセンタージャーナル, 4, 2-10.
- 山本仁志・諏訪博彦・岡田 勇・山本浩一 (2008). ブログ空間上のコミュニケーション発生メカニズムの分析—日本社会情報学会誌, 20, 29-42.
- 山下まいこ (2001). なぜ生身の人間と付き合えないの?—子どもと健康, 66, 26-27.

How are the Cellular Phone and The personal Computer Used?

-Relativity with Social Support-

Yukari Umoto & Noriko Kusakabe

The purpose of this study was to examine the possibility to get social support with the Internet. The questionnaire was carried out for elementary school students, junior high school students, high school students, and university students. The results showed that most students e-mailed the cellular phones with mothers or school friends with same sex for a long time. It was suggested that e-mail became one of the means to provide social support.

(指導教員：日下部典子)